
たっくまん

座布団

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たつくまん

【Zマーク】

Z0354A

【作者名】

座布団

【あらすじ】

東京都ばつとむ町。そこには宇宙の平和を守るために日夜戦う、正義の宇宙人が住んでいる。たつくまん、ひろきまん、じゅんぺまん、とつくまん、レイ。宇宙連盟府直属の機関、H-Rの一員である彼らは、凶悪宇宙人による犯罪を防ぐべく、割とのんきになりふりかまわず暴れまくる！－宇宙の話なのに妙にスケールの小さいSFアクションコメディ－！－

プロローグ

彼らはいつたい、何者なのだらうか？ずっと思つてきただ疑惑だ。まず彼らの格好。

マントやらハチマキやら肩当てやら。拳げ句の果てには剣やらバズーカやら。

それ以前に、地球人ではないのではないか？そつ思つ。だが、この町の人は何も言わない。

次に彼らの名前。

たつくまん、ひろきまん、じゅんぺまん、とつくまん、レイ……

なんだこの名前は。

ふざけてるのか。

入居願いの書類にこんなのが書かれてれば、不審に思つのは当然だろ？？だが私の妻は、

「最近は変わった名前の子供も多いからねえ」

といつて相手にしない。

何故だ。私がおかしいのか。…まあいい。私はただのアパートの管理人だ。たとえ庭先で真剣を振り回されたり、頭から出した（この時点でおかしい）バズーカで部屋を潰されたりしても、目をつぶつてやる。また爆発音が聞こえる。いや、これはなんでもない。そうに違いない……。

プロローグ（後書き）

とじ憑かれたように一日で書き上げた作品です。改行とかめひやく
ちやかもしれませんが、勘弁して下さい。

じある町の風景

「H・R」

ところづ言葉がある。

「存じだらうか。

まあ、知らないだらう。

言つておぐがホームルームの事じやない。

H・Rといつのは、宇宙の混乱を防ぐために設立した、超巨大な規模の機関の名だ。

誰が何と言おうが眞実だ。

彼らは密かに地球に潜り込み、宇宙人による犯罪を防ぐために活躍している。

これは、H・Rの一員として数々の事件を解決してきた、屈強な戦士達の、眞実の物語である。

ひろきまんは幸せだつた。

明るすぎるぱつとむ町の町並みを窓から眺めながら、モーニングコーヒーなど飲んだりしていた。

久しぶりにゆつくり過ごしている気がする。

今はじゅんぺまんはトレーニングに行つてゐし、レイは買ひ出しこ行つてゐる。

とつくまんは…どにかに居るだろ、たぶん。

そして何より、たつくまんのアホが居ない。

奴が町をパトロールするのはそれはそれで不安ではあるが、あんなヘタレでもいなよりはマシだろ？

それにはこんな時間から馬鹿やる宇宙人もいるまい…。

いた。

見える大通りの一角が、ハリウッドアクションのノリで吹っ飛んだ。破片が四方に飛び散る。その中でもひときわ大きな破片がこっちに向かって猛スピードで飛んできている。いや、あれは…たつくまんだった。

たつくまんは窓を軽く突き破ると、私に向かって狙つたかのように飛んできた。全く、朝から騒がしい奴だ。とりあえずやんわりと叩き落としておいた。

「ごふおつー？」

床に叩きつけられるたつくまん。

痛そうではある。だがバネのように立ち上がると、私に詰め寄ってきた。

「テメー今わざとたき落としたり？…」

「いや、今のは避けきれないと思つてな…」

「嘘つけ！…思つきし冷静に対処してたぞ…」

「おお、対処とか難しい言葉使つてきた。

成長したな…何て感心してる場合じや無い。

「それよりお前、今回は何だ？ＳＴか？お前がただ単に騒ぎを起こしただけなら、今度こそお前捕まるぞ」

ちなみにＳＴとは、スペーステロリストの略だが、とにかく宇宙人には妙な連中が多い。

牛盗んだりわざとカメラに映つたり変なサークル描いたり。

そういうのはまだしも、もつとタチが悪いのを取り締まるのが宇宙連盟府直属のH・Rの役目だ。

窓から

「いや、今回は…じゃなくて今回もシテだ
たつた今突き破つてきた窓を見据えるたつくまん。

血まみれで焦げてなければそれなりにサマになるのかも知れないが

…

「どうか、なら急がないとまずいな」

私達はテレビの電源を切り、ガスの元栓を締め、戸締まりをきちんとして、最後にもう一度全部チェックした後、少しおやつを食べて大通りに向かった。

大通りは酷い有り様だった。

ビルは崩れ、アスファルトは念入りに砕かれていた。
この短時間にここまで破壊できるとは… というか、朝妙に明るかつたのは火事のせいか?

「こりテメー！さつきはよくもブツ飛ばしてくれたなあ…！」

その三流悪役のようなセリフしか言えないボキャブラリー何とかならないのだろうか。

ともかく、騒ぎの原因は田の前にいた。

全身を黒いターバンのようなもので覆つており、手には《U - N》製の爆薬、そして発火金属デクマイト。

宇宙人に間違ひ無い…というか、こんな奴どこから来たんだ? ターバン男が口を開いたようだ。

「来たな、H - R。恐れをなして逃げちまつたんじゃねえかと思つてヒヤヒヤしたぜ」
どうやらヒヤヒヤしてたらしい。最近こりつて力試しをしたがる連中が増えて困る。

「さあ、これ以上町を壊すわけにはいかないな。お前はどうする、たつくまん」

「決まつてんだろ、正面突破だ…！」

こんな事を真顔で言えるからコイツは凄い。

「うおおおおおー…！」

突っ込んでいった。いつものパターンで行くと、たぶんキックしようとするとするだろう。

「グラインドキック！！」

普通の蹴りだ。

避けられた。

殴られた。

爆弾投げられた。

また私達のアパートに突っ込んだぞあいつ。

いい加減大家さんもキレるんじやないか、ターバン男がこっちを向く。

「話にや聞いてたが、思った以上に弱えなあおめーら」

持つている爆弾をお手玉しながら楽しげに笑う。私もあんなふうに笑いたい。

「結論を出すのはまだ早い、後ろを見てみるんだな」

「？！」

ターバン男の背後で真紅のマントが翻る。

仲間の一人、じゅんぺまんのものだ。

じゅんぺまんの剣はターバンをわずかに削り、地面に突き刺さる。

「なつ…」

思わず口を開いてしまつたらしい。

ターバン男が少なからず動搖しているのがうかがえる。

それもそのはず、今私が後ろを見ると言わなかつたら、間違いなく剣は男を捉えていただろつ。

じゅんぺまんは持ち前のスピードと技の多彩さで定評のある男だ。対人格闘では私以上かもしない。そのじゅんぺまんが口を開く。

「もーひろきまんさあ今の絶対当たつてたつてマジでえ」

性格は割と軽い。

「…まあいいや、次は当てる…」

ターバン男が身構える。

じゅんぺまんの剣が閃…かなかつた。

以前として地面に刺さつたままだ。じゅんぺまんがボソソッとつぶやく。

「…………抜けん」

辺りは静かになつた。

ちゅうどーん。

じゅんぺまんは剣と近くに落ちた。

彼の唯一の弱点、それは天性の運の悪さだ。

こればかりはトレーニングのしようがない。

これを打開すべく、最近風水に凝りだしたのだが。効果はまだないようだ。

「…ハハツ、驚かせやがつて」

たぶん、ホツとしてるんだわつ。

ターバン男が再びこっちを向く。

…やれやれ、私がやるしかないか…と思つたその時、

「ひろきまんさあああん…！」

レイの声だ。

チーム最高の紅一点（と本人が言つていた）で新人H - Rだ。

ターバン男を弾き飛ばしてこっちに駆けてくる。

「今飛んでいつたのじゅんぺまんさんですか？！」

確か買い出しに行つてたはずだが、買い物袋を持つてない。

「あ、買った物はとつくまんに任せました」

…何も言つてないんだが。

「レイ、じゅんぺまんを頼む」

私は肩当てを外し、それを重ねた。

両端から棍が飛び出し、武器になる。アーマーロジドといつ私の得物だ。

「分かりました、気をつけて下さいね…」

元気に駆けて行くレイ。

風に乗つてたまにはひろきまんさんの面倒見たいなあーとかなんとか聞こえる。

「くそつ！ふざけた奴等だ…」

弾かれたターバン男が腰を押されて立ち上がる。

「ここまで「ケにされちや、このダークマリーの名折れだぜ」

ターバン男はダークマリーといつらしい。

微妙だ。だがそんなことより、怒りだす前に決着をつけねばなるまい。決断は一瞬だつた。数メートルを弧を描くように数歩で移動し、ロッドを左斜め下からダークマリーの首元に叩き込んだ。ターバンの隙間から見える瞳が驚愕に歪む。だが、浅い。何とか聞合いでをとるつもりなのか、勢いよく後ずさる。させない。

「ロッド・スプラッシュ」

エネルギー増幅により高速化した打撃が、ターバンを縦横無尽に擊ち碎く。

さすがに、もう立てないだろ？

レイと文字通りミイラになつたじゅんペまんがやつて来る。いや、じゅんペまんは無理矢理引きずりれている。

私もそつちに向かおうとしたその時、背後で物音がした。見ると、ダークマリーが仰向けになり、笑っている。

「へへ…油断したな、H・R」

ダークマリーの視線の先には、集まりだした野次馬がいた。背筋が冷たくなつた。まさか、爆弾を

「ヘッドバズーカアアア…！」

爆風が辺りを包んだ。

今のは…たつくまんだ。

どうやらダークマリーよつ先に攻撃したらしい。

そして、自分は巻き込まれたらしい。

爆風にもまれながらひろきまんは思つた。

爆弾魔にバズーカ撃つな、ボケ…！氣付いた時、ひろきまんは病

院の一室にいた。

「お、起きた？」

最後のメンバー、とつくまんの声がする。

そうか、彼が後始末してくれたようだ。

話によると、たつくまんがダークマニーより先に攻撃したおかげで、民間の人に被害は出なかつたらし。

ケガの功名といつやつか。とつくまんの隣にはレイが座つてゐる。

「ひろきまんさん、リンゴ食べますう？」

すでに皮をむきはじめてゐる。

「…君も割と爆発に近かつたよな、大丈夫だったのか？」

レイはニッコリ笑つて答えた。

「ええ。じゅんぺまんさんが守つてくれましたから～」

確かあの時彼は氣絶して…

「守つてくれたんですね」

……じゅんぺまんは向かいのベッドで死んだよつに寝てゐる。実際死んでそうな氣がして恐くなつたので、話題を変えた。

「そういうば、たつくまんは？」

またパートナーに行かされていふらじこ。あいつなら例えテポドンをくらつても1時間くらいで完治するだらう。

とつあえず、今回の騒動は終わつたよつだ。

毎度毎度、良く生きてゐると思つ。

「皆のおかげですよ」

レイが天使のような微笑みで呴く。

……彼女とは話さず意思疎通出来るかもしけない。

だが実際、その通りだ。

これまで体験してきたいくつもの事件は、このチームでないと解決できなかつただろう。

とつくに死んでいたかもしえない。

いや、きっと死んでいた。

私をリーダーとして生かしてくれる旨に、改めて感謝すべきだね。レイが切ってくれたリンゴはとても甘かつた。

窓から見える夕焼けのぱっとむ町が、一層赤くなつていく気がした。

その時、窓から見えるビルの一つが突然ハリウッドアクションのノリで吹っ飛んだ。

破片が四方に飛び散る。

その中でもひときわ大きな破片が二つちに飛んで来た。

もうだいたい察しはつくが……

たつくまんだつた。

ある町の風景（後書き）

疲れました…でもまだ書きたい話はたくさんあります。誰か読んでくれる人いたら嬉しいです。

「ゴーレイ大騒動・食卓編

「ゴーレイだつてよゴーレイ！」

開口一番、じゅんぺまんがそんなことを言った。
夕食の席での話だ。
ばつとも町H・Rの皆でレイの作ったびっくり煮込みカレーを食べ
ている。

ちなみに僕のにはしゃもが丸ごと入っている。
ビミラーなもん入れてるなあ、レイちゃん。
「そんでさあ、そのゴーレイつてのがさあ……」

僕たちH・Rの大半は、各自担当の星に住み込みで仕事をしている。
よつするに単身赴任だ。宇宙規模のくせに地域性が強い。

更にH・Rは支部、支本部などが……

「……聞けコラアー！」

頭はたかれた。

どつやら僕に話してたようだ。
じゅんぺまんが顔を近づける。

「聞いてたか？！とつくまん！」

聞いてなかつたわけじゃ無いんだけど……さて、どつするか。
ここで下手に答えるとまたはたかれる。

それとなく周りを見てみた。

ひらきまんはこないだの騒動の報告書に田を通していく。
聞いてないところより聞くこえてない感じだ。

レイはそんなひらきまんをぱーっと見てこる。
さすが趣味はひらきまんと豪語するだけのことはある娘だ。
じゅんぺまんの話は…こっちも聞こえてないんだろう。
シカトしてゐわけじゃないと信じたい。

たつくまんはホタテの次に嫌いなシイタケをどう処理するか考える
のに必死だ。
その中にじゅんと食べるところ選択肢は無いんだろうな。

……なるほど。今日は皆じゅんぺまんの話に乗つてくれそうに無い
な。

とりあえず無難に返事しよう。

「はあ…コーレイ? それがどうかしたの?」

じゅんぺまんは機嫌を直してくれたらしく。
大きくなづや、机から身をのつだしてきました。
「何か最近、ここに近づいて出るひじいぜ」

口の横に手を当て、内緒話のモーションをしてはいるが、ボリュームは近所まで聞こえるレベルだ。
うるせえ野郎だ、と思つてはいけない。これがこここのキャラなの
だ。

「今日ジョディから聞いたんだだけじゃあ

誰だそいつは。

と言いつこうになつたがなんとかこいつえた。ムダに話を長くする必要
は無い。

ていつか外人……？

「ジョディが仕事の帰り、いつものように夜中のばつとむ町の通り
を歩いていたら……」

「仕事つて？」

思わず口を開いて一瞬、無駄な質問をしたと思つたが、気になつた
からしかたがない。

「駅前の公園とかでたそがれてるサラリーマンに救いの手をやしの
べるとかなんとか」

「……救いの手？」

また思わず口を開いて一瞬（以下略）

「史上最高の宗教メガハツ・ピィハツ・スル教の信者にするんだと」

やつぱは聞かなきや良かつた。

どんな友達付き合いしてんだこの男は。

まあ、友達選ばないのはある意味偉いかな…。

「んで、そのメガハッピイ教のジョディさんがどんなアンビリバボーに遭遇したわけ？」

「ジョディが見たつてわけじゃないらしいがな」

一度言葉を切る。話し方がこいつは上手い。

「今信者の中でヨーレイを見たつて奴等が異常に増えてんだと、んでそれと同じ頃から妙な事件も起きてて心配なんだつて」

「妙な事件？」

「行方不明とか」

……妙つづーか……

「…それが宇宙人と関係してると言いたいんだな

あれ、ひろきまん聞いてたんだ。いつの間にか報告書を置いてこっちを向いている。

「ところよつ面白いつと思つてますね？」

レイが付け足す。

まあ、彼女が言つたり間違いない、といつかじゅんぺまんの顔見りや誰でも分かる。

「ナビレ、違つてないわで良し、ベンハ」など……」

捕まえる、と。確かに正論だ。

ひろきまんもうなづく。

「やつだな、明日あたりつかがつてみるか

「明日と言はず今日でよくな?」

いきなりたつくまんが言い出した。

シイタケ食いたくないだけだろお前は。

たつくまんを見る皿の皿もそつ行いたげだ。

レイがにじりにじり皿へ。

「ちやんと食べよう

.....

静かな食卓になつた。

コーレイ大騒動・突入編

夜のばつとむ町は微妙に静まりかえっていた。ベッドタウンとしての機能が強いこの町は、静かでも人の気配が消える事はあまり無い。

だから恐怖の都市伝説みたいなのもできやすいといえばできやすいのかもしない。

「ホントにいんのかよ、コーレイなんて」

たつくまんが言つ。無理矢理シイタケを食わされて「機嫌ななめの様子だ。

「一般的に言つて可能性は低いだろう。見間違いか、あるいは精神及び肉体の疲労から来る軽度の幻覚症状か…」

律義に答えるのはひろきまん。聞いた本人は意味分かつてないけど。「いずれにしろ話を聞いてみない限り何とも言えないな。一般的なんて言葉は…あてにならないからな」

ひろきまんの隣りをぴったりマークしてくるレイもうなずく。

まあ僕ら自体が一般的でないもんなあ。

宇宙人なんて地球人にとってこそコーレイと同列だ。

僕らは今夕食を終えて例のメガハッピイ教とやらの事務所に向かっている。

夜のばつとむ町を5人並んで歩いてる僕らははたからみたら滅茶苦茶怪しいんだろうけど、気にしてるのは僕だけのようだ。

…しかし、幽霊か。

いるいないなんて僕には分からぬけど、いたとしてもおかしいとは思わないな。

宇宙にも迷信じみた話は多い。

あり得ないと思えるものばかりだけど、何故か僕はそれを否定する気にはなれなかつた。

「とつくまん？」

ふと気づくと、横からレイがのぞきこむようにこっちを見ていた。

「どうでもいいが、僕とたつくまんだけ彼女は呼び捨てだ。

「何考えてました？何かまた変なことですか？」

「またつてなんだ？」

「いや、別に…何でもないけど」

「ふうん……」

疑わしげにまだこっちを見ている。

彼女は人の心を読むのが得意だけど、僕には上手くいかないらしい。

それがシャクなんだろうか？

「着いたぞ！」

少し先を歩いてたじゅんペまんが振り向いて手を振っている。

意外と歩いてたようだ。

人通りの多い所まで来ていた。

そこは駅前だつた。

見たところテナントビルの三階にあるらしい。

麻雀やマッサージや駅前留学できるところに混ざつて、『メガハッピ

イ教』の看板がある… のだが。

「間違つてません？あの看板

レイがぼそりと言つた。

『間違つてる』僕とひろきまんがハモつた。

まず、文字がピンク。

んで、繁華街を思わせるネオン。

看板のスミにはマスコットキャララシキ不細工なネズミが描かれて

いる。

宗教にマスコットとはいいで胸してんなあ。

「…大丈夫だらうか？」

悩みグセのあるひろきまんはすでに頭痛がするらしく、頭を押さえ

てうめく。

「んでもこーからよ、さつと終わらせて帰るづば」

たつくまんが言ひ。お前が行きたいつたから今日来てんだけど…

「まあまあ、とりあえず中に入つてから話そいや」「ざひづ

じゅんぺまんが入り口を指差しながら言ひ。

「そうだね、今めちや僕ら目立つてんし

僕のセリフにたつくまんが

「そりかあ？」

とでも言いたげな顔をしてくる。

こいつは行き交う人の奇異の視線に気づいとらんのか…。

三階に上がりながら、僕は思つてた事を聞いてみた。

「怖くて聞けなかつたんだけどさ、ヤバい宗教じゃないよね？」

新興宗教なんて最近は物騒なことこの上ない。

「あのなあ、いくらなんでもそんなんと友達にはならんだろ」「ひ

じゅんぺまんは呆れたと言わんばかりだが。なんせお前だからな…。

「んじや、教団とかこの事務所に来たことあるんだ」

「いや、無いが」

どつから来んだよその自信。

「ならやっぱいかどうか分かんないじやん」

「ああもー、どうせもうすぐ分かんだろ！怖がんなつて、腹くくれ

！」

「そうこう事を言つてるんじや…

「そこまでだ。……着いたぞ」

ひろきまんの声だ。

じつと前を見据えている。

三階は静かだつた。

ドアには『メガハッピイ教』と書かれたプレート。

表の看板と違い、いたつて普通のものだ。

ピンクでも、ネオンでも、不細工なネズミでも無い。

「うーし、開けっぞ」

躊躇なくたつくまんがドアノブを回せりとする。

さすが怖いもの知らず。

こんな時の行動力はすごい。

廊下は意外なほどきれいだつた。

なんというか、清潔さより不気味さが強い。

突き当たりは大きめの窓になつていて、今は誰かがこつちを見て笑つてゐる。…………。

「うおおわああ！？？」

「なんだ、どうしたとつくまん？！」

ひろきまんが驚いてこつちを見ている。

すでに武器を構えているのが彼らしい。皆も僕を見ていた。

「今、窓の外に誰かいたんだよ」

皆も窓を見るが、当然窓にはもつ誰もいない。

「……いないじやねえか」

「見間違いじやないですか？」

「なんだよとつくまんビビつてんなよ！」

うつ……氣のせいだつたのかな？ちょっと窓の方に行つてみた。

心のどつかで怖がる自分がいたがそれは無視する。

窓の外はいわゆる路地裏というやつだった。

すぐそこにビルの壁があるが、足場になりそつなものは見当たらなかつた。

おまけに落下防止のためか、それとも壊れてるだけなのか窓も半分しか開かない。

…………時間の無駄だな。人の気配も無いし。

「いやあごめん氣のせいかも」

照れ笑いして戻つた。

皆は改めてドアを開けようとしている。

予感がしていた。

見間違いなんかじゃない。
何かが僕らを見ていた。

今のが今回の事件に関係あるんなら、あっちから出向いてくれるだ
ろ。う。

恐怖のコードとやらが……。

「コーレイ大騒動・激動編

僕はこれまで生きてきて、宗教というものには得体の知れない不気味さを感じてきた。

ぱつとむ町にやつて来る前はH-Rの戦闘補給員をしていた。分かりやすく言えば戦争とかが起きた時に、補給部隊を守つたりする仕事なのだけど…おかげで嫌というほど地獄を見てきた。

宗教が原因で起きた大戦も数多くあつた。

こいつはタチ悪くて、両方潰さねえと終わんねえんじやねえかつてくらい長引く。

そんで何だか知らないけど信者の皆さんは他宗教の人いたら冷たい。

何のための宗教なんだか…人を救うのが宗教じゃないんかね。

……とはいえ、その宗教を心の支えに生き抜いている人達も沢山知つていてる。

そんなわけで、まるで宗教に踊らされてる気分なのであつた。

だけど…このメガハッピイヒヤウは…

「…」

ドアを開いた途端、ずらりと並んだ女人の人達。

部屋は薄暗くて、なんともいえない怪しげが爆裂四散してゐる。

「う、うわんくせえ…

これには幾多の戦いをくぐりぬけてきたばつとむエ・ルの歯も皿葉
が出ない。

「…………何だ？」「これは

ひろきまんがたつぱりと間を置いてつぶやく。
この人はこーいうとこに全く馴染みなんて無いはずなのに、動じた
ような感じが少しも無い。

「みたとこキヤバクラな感じですねえ。ホントにこなんですか？
…じゅんぺまんさん」

ドアに名前があるのだからこりで間違いない。
それなのに「うつ」とことを聞くのは非難してゐる証拠だらつ。
もしくはからかつてゐる？

当のじゅんぺまんは彼自身予想外だったりしく驚いてゐるようだ。

「あ、あのさあ…君達、ジョディで人知らない？俺らメガハッピー
教の事で来たんだけど」

並んでる娘たちに話しかけると、真ん中の娘が口を開いた。

「ええ、店長から聞いてますよ だからお出迎えしてるんです。さ、中へどうぞ」

「どうやらジョーディは店長をしてるらしい。」

怪しい店内…なのか事務所内なのか…どちらでもいいけど。

とにかく中に入ると、前髪のカールした大人っぽい女性がソファーに座っていた。

「おう、ジョーディ！ お前店長だつたんだなあ！」

「あら、ずいぶん早いわね。早くても明日だと思つてたのに…」

「この人がジョーディか…ホント？」でこんな人と知り合つんだろう？
いや、それより…

「どー見ても日本人だな」

たつぐまんが言う。

「…確かに。てつきり外人だと思つてた」

宇宙人が外人とか言える立場じゃないが。

「ふふ…ジョーディって名は新名つて言つてね、メガハッピイで改名

したの。昔は普通の名だつたわ

なるほど……そういうのよくあるな。たつくまんも納得したらしい。

「なるほど。カルーセルなんたらて奴が名前を変えたみてーなもんか

それは何の関係も無い。

ジヨデイが艶っぽい笑みをたたえて話しかける。

「立ち話もなんだから、奥にある事務所用の部屋で話しましょ？」

てなわけで皆で奥の部屋に行つた。キヤバクラ兼事務所なのかな？

「私達今困つてゐるの」

いきなしそうきりだしてきた。

確かに事務所用というだけあり落ち着いた内装だ。

後ろで並んでるお姉さん達が果てしなく不自然だが。

「つちの信者が何人も失踪してゐる。店の皆も幽霊を見たつていうし……」

僕の脳裏についさつき見た窓の人影が浮かんだ。

ユーレイ、ね……。

「私達けして楽な暮らししてゐわけじゃないわ。教団の運営にはお金がかかる。だからこりこりう真似もしてる」

「寄付みたいなのがせないんすか?」

思わず口が開いた。

ジョディはどことなく陰のある顔をこちらに向ける。

「してなことは言わないわ。でも元がリストラされた人ばかりだから…」

ふうん…珍しい教団だな。

キヤバクラはどうかと思うけど。

「……経営に関して私達がしてやれることは何もありません。残念ですが」

ひろきまんが口を開く。

「友人の仲間にそこまでさせよつとは思つてないわ、でもあなた達探偵なんでしょう?今回の事件…調べてくれないかしら」

「もうひるんだつて!そんなコーレイ野郎俺がぶつた斬つてやる!」
はあ……タンテーねえ。適當なこと言つてなんじゅんぺまん。
とはいつても他にいい嘘思いつかないけど。

「もうひるんだつて!そんなコーレイ野郎俺がぶつた斬つてやる!」

がばつと立ち上がるじゅんぺまん。

後ろでお姉さんがたがキヤーとかカツコイイとか言つておられる。
さすがおだてるのが仕事のだけはある。
そんなのは無視して話は進んでいた。

「どうします?ひろきまんさん」

「どうにも見えない部分が多いが…まあいいだ。私達が調べればい

いだけの話だ

結論が出たようだ。

「いいでしょ、うジマテイさん。引き受けます。報酬もいりません」

「本当? 良かった。これ以上信者を失うわけにはいかないわ、お願
いね」

話は決まった。んじゃ明日から…

「うつしゃじやー今から調べにいくぜ。話…」

はい?

「い、今からあ?…」

またこんなこと言い出すしこの不運剣士は。

風水の効果どうせ全然ねーんだろ…って関係無いか。

「もういいじゃんかじゅんべまん。明日からこじょよ」

時刻はまもなく深夜だ。

「バーローといつもんてめーゴーレイを夜調べねーでいつ調べんだ
よ…」

やつはわれねばなんな氣もあるが……

「善は急げだ！先行つてゐるが既あ……」

「アーラ行くんだアイジ？」
「アーラをぶつとばして走つてしまつた。詳しへ聞いてないの？」
「…………」

……確か……。

ユーレイ大騒動・哀愁編（前書き）

ヤバいくらい間が開いてしまいました。何かノリが変わってしまつてるかもしません。

「コーレイ大騒動・哀愁編

「何なんだよ全く…」

ああ、いかん。なるだけ愚痴らないようにしてるので…。
しかし止まらん。帰つてゲームしたかったのになあ…。

「どこいったの? ジュンペーさん」

ここばつとむ町も一応東京のはしぐれだけあって大通りは人多い。
雑踏の中人を探すのはたとえ対象が赤マントで帯刀してゐる野郎でも
難しいだろうなあ。

「手分けして探すしか無いな。各自幽霊について聞きこみをしながら
やつてくれ」

ひろきまんが妥当な指示を出す。聞きこみか…苦手だなあ。

「私は北の大通りに行く。とつくまん、後は頼む」

颯爽と向かうひろきまん。かつこいい人だなホント。

「んじや、オレあ西んアーケードいくわ」

のここの歩いてくたつくまん。

まあ大丈夫…かな。聞きこみならあいのつの方が上手いだろ？

「じゃあ…あたしは東…で」

渋い顔で遠くを見るレイ。

視線の先にはひらきまんがいるのは間違いないな。

「北に行くなよ~」

「大丈夫ですよ。……はあ

レイはトボトボ歩いていった。

…さて、僕も行くか。

「南か…」

南には特に何があるわけでも無い。

ばつとむ町らしく商店に店やら家やら並んでるだけだ。

む、若い男発見。コンビニ帰りだな？
聞きこみしてみるか…気は進まないけど。

「えーっと、すんません。聞きたいことが…」

若い男がこいつを見た。

「んあ？ んだよテメーウゼえな」

んー、まあそりだよな。夜中だしな。うんうん。

「あのですね、最近こりで行方不明事件がありまして……」

「邪魔だつてんだろコラリぶつ飛ばすぞどけ」

かなりメンチ切つてくんないの兄ちゃん。聞く奴間違つたな……。

兄ちゃんは僕をはねとばして逃げよつとする。
せつからく声かけたんだからこいつちも遠くに退けない。

「なんか知りませんかね？ 幽靈が出るみたいなウワサとか……

と、突然兄ちゃんは振り向いて胸ぐらを掴んできた。

「うわせえぞボケが、殺されてえのかーああーー！」

……むむ、しかたないなあ。

僕は兄ちゃんのすねを蹴りとばし、回り込んで腕を折れる寸前まで

ひねり上げた。

たまらず倒れ込む兄ちゃん。

持つてた買い物袋も落としてしまった。中身は焼きそばό。

幸い大通りからはだいぶ離れてたので、辺りに人の気配は無い。

わらう声をあげさせないために口を腕できつく絞める。

「うるせえのはお前だよ、少しは話聞けや」

むーむー唸る兄ちゃん。

「んー? 何だ? 何言つてんのかわからんねえぞ、ん?」

少しだけ腕に力を入れた。

さらに絞まる。兄ちゃんのむーむー声がわらうヒートアップする。

.....。

なーんて上手く行つたらいいんだろけど僕にはそんな真似できませんよ皆さん。

え? 今? うんまだ胸ぐら掴まれたまんま。だから腕捻つたり締め上げたりしてない。

ほひ、

「うわっ」

とか言って引いた人たち帰つて来てくれ、頼むから。

とか脳内で意味分からんイメージが膨らみながらも流石に胸ぐらを

掴まれるのはあつこので僕はとつあえず答えた。

「あ、すいません。邪魔でしたよねホント。何でもないです」

愛想笑いを浮かべて咳けば、兄ちゃんはケツとか分かりやすい悪態をつきつつ乱暴に手を放した。

「うつぜえなマジド」

と一言吐き捨てて此方を少し睨みつけながら去っていく。

うーん殴りたい。青キヤンかけて17分割したい。

「…まあ、そんな真似できないけど」

ぶつぶつ言しながら僕は再び夜の街へと溶けて行き……表現がアレだな何か。

僕が夜遊びしてるみたいだなコレ。

言つとくけど僕はとても眞面目な人なので誤解の無いよつと。自分で言う奴は胡散臭い?黙れ。

そんな感じでおつかなびつくり聞き込みを開始して早小一時間。

ぶつちやけダルい、眠い。

そもそも良心的に協力してくれる人自体あんましいない訳で……たまに話聞いてくれる人がいても幽霊の事なんて誰も知らんがな父さ

ん。

親父会つた事無いけど。

とか何とか聞き込みも放棄してぼーっとしつつ歩いていたら、いつの間にかニースリポーターが歩いていそうな閑静な住宅街に来ていた。ノリコさんは見当たらないが。

軽く溜め息をついて見回せば、辺りは真っ暗。

闇を押しのけるには心もとない街灯の青白い光が遠くでチカチカと不定期に点滅している。当然人気は無い。

肌寒い……不意にそう感じた。まあ夜中なんだから仕方ないっちゃ仕方ない。

腕をさすりつつ、ふと思いついたように懐から通信機を取り出す。皆はどうしているだろ？、まあ今日は収穫無しだろ？けど。といつかじゅんぺまんのアホは見つかったんだろ？か……

通信機を耳に当てるが、無意識に視線は前へと向く。

「ぐく自然な流れで通信機のスイッチを入れ……

なかつた。

振り向き、通信機を仕舞つとその手で刀身の無い剣の柄のよつた物を取り出す。

「やつと来たか…」

ぼそりと呟くと路地の隅からゆつたりとした動きで黒装束の男…ええと、多分男が現れる。顔は分からぬ。

「いつから気づいてたんですね?」

頭巾の下で僅かに笑いを漏らしながら尋ねてくる。

何が面白いんです? 何でこう敵つて奴はイヤな笑いをする奴ばっかなんだろ。

僕は無言で柄を握り締める。柄の周りの空間が一瞬歪む。

次の瞬間には、6角形の金属棒…鉛筆のような刀身が現れていた。通称ペンシリソード。剣としての切れ味は皆無だが様々な機能を備えている。

「…行方不明の人達を何処にやつた」

両手で握り刃先を真っ正面に構えながら呟く。正直つけられている事など気づいてなかつた。

やつと来たか、といつのは予感の事だ。これから起こり得る事の一連の予感。

「私の質問は無視ですか? ま、あの無警戒振りを見れば大体は分か

りますからいいんですけど。行方不明… さて、何処でショウネ。明日位には出荷されるのかな?」

額を大仰に押さえ、空惚けた口調でケラケラと笑う。

「…人身売買か」

苦々しく言葉を絞り出す。手にも力が当然入る。

地球という惑星は宇宙全体から見ればちっぽけな辺境惑星だ。だがその資源の豊富さと、発展途上の文化を持つ人類が住まう地球は、ＳＴならずとも利用価値があり、魅力的だった。

だから宇宙連盟府は地球への過度の干渉を防ぐ為に保護、規制を徹底しているんだけど、それは地球の産物の希少価値を高める結果も招いてる、と。

要するに地球人が裏ルートで高値で取引されるワケで。鑑賞用、研究用とか色々あるらしいけどとにかく外道には違いない。

「ホントこんな奴ばつか…」

忌々しく吐き捨てると黒装束は肩を竦め、言い返す。

「それは此方の台詞です。良いじゃないですか地球人の10匹や20匹、大した数じゃないですよ。

それを貴方方は几帳面に規制して下さつて… ねえ? H—I—R。何処の

惑星に行つても「ヨキブロ」のよひで「ウジャウジャウジャウジャ」…邪魔なんだよ！！」

言い終わると同時、突っ込んできた。

極々普通の突進だけ…速い！

思い切り上体を屈めた体勢から、僕の肩辺りに向けて右の抜き手で突きを放つてくる。

迎え打つ事は避け、左斜め前に半身をずらして突きをかわす。

すれ違う時に分かったが実は抜き手ではなく指の間に針を挟んでいた。

卑怯だなんて言つても「はモ頭無いけど、やっぱ性格悪いな」「イツ。

無防備な側面から反撃しようかとも思ったが、とつさの判断で一步後ろに飛び。

お互ひ、一瞬前と位置を入れ替わった状態で硬直し、対峙する。

「へえ、よく見えてましたね？」

黒装束がヒラヒラと左手に持つた短刀を振る。右脇の下からじつちを刺すつもりだったらしい。

「いや、何となく

本気で何となくだ。だって予感だから。

「大したゴキブリですね。H—I-Rには勿体無い人材が沢山埋もれていて非常に残念ですよ」

楽しげに肩を揺らす黒装束。いやだから何が楽し……もういいか。

「遊びは終わりだ、ペンシリルワイヤー」

ちょっと自分でも恥ずかしくなるノリで言いつつ剣を相手に突きつける。

距離は幾らか離れている。

だが剣先から高速で射出されたワイヤーが一人を結ぶ線のように伸び、黒装束が反応する間も無く奴の左手に巻き付いた。釣りの様に柄をギリギリ握り、相手の動きを封じる。

「ジョディさんに頼まれたからには、お前をきつちつ捕まえないとね」

相手の真似をして笑つてみる。自分上手く笑えてない。

と、突然黒装束がくつくと笑いを零した。

「ジョディねえ…何の話？私がジョディですよ」

頭巾の下でもニヤリと笑つたのが分かる。頭巾を捲るつもりなのか右手を上げている。

……これだつたか、嫌な予感は。

薄々感じていたはずなのに。

男にしては線が細い事。

そして不自然なメガハッピイだか一時期流行ったファービーだか言う馬鹿馬鹿しいキャラクラ宗教。

全て僕等を仕留める芝居だった訳か…

「隙有り。」

黒…いやジョディの咳き声が聞こえた。

気づけば僕の喉元に針が突き立っている。痛みは、無い。

…あ、ヤバ。手に力入んない。

右手は頭巾を捲ろうとしていたのではなく針を投げる為に上げてたらしい。

柄から手が離れ、無意識に膝をつく。そのまま手をつきもせずアスファルトの上に倒れる。朦朧とした意識の中頭の中だけでジョディの言葉が響いた。

「安心して下さい、ちょっとした麻痺毒です。貴方の種族は大した価値も無いですがいよいよはマ……」

最後まで聞き取る事は出来なかつた。

「コーレイ大騒動・完結編

…………て。

…………きて。

起きて。 田を開いて。

「…………う…………」

酷い頭痛だった。 一体どちらが天井かも分からぬような、浮遊感にも似た頭の痺れに呻き声を漏らす。

左側頭部に冷たく硬い感触を感じるので、左を下にして床に寝かされているのだろう。

無意識に顔をしかめながらも、田を開いて辺りを見回す。 首を回しただけで脳の中心がズキズキと痛む。

……何か、酔いつぶれた時みたいだ。

そこは、見た所倉庫だった。 薄暗く、棚に囲まれ、辺りにはダンボールが積まれている。

漂う埃の匂いから、それらが相当放置されている物である事は何と

なく分かつた。

よく見るとダンボールにはマッシュキーペンぽい字で
「十色工業」
と書かれている。

十色工業と言えば…確かに僕等がここに配属された直後に潰れてしまつた会社だ。大規模な会社だったのか、ばつとむ町の郊外には倉庫やら工場やらの数多くが今でもそのまま放置されていると聞いた事はあつた。

…つまり、居場所を特定する事が出来ないって事だ。

ばつとむ町郊外である事は分かるが…

ふと、今になつて両手足を縛られている事に気がついた。
まあ痺れていたとしてもH-E-Rをそのまま放置するU-Tなんている
わきや無い。

「…やれつちり装備も外してくれちゃつて…」

捕虜にされたソリッドよりじく、服や頭に巻いたバンダナぐらいしか装備は無い。

少し手首や足首を動かしてみる。

当然といつか何といつか…キツチリ締めてあり、ちょっとやそつと
じやほどけそつも無い。

辺りに刃物やらガラスの欠片やら、利用できそうな物も見当たらぬい。

「…………」

困った、力も入らないし頭も回らない。とりあえず脱出した方がいいにはいいはずなんだけど。

ああ、誰か捕まえられてる人達が一人でもいればなあ……話聞けるのに。流石にドームを同じドームには入れないか。

……ん?

そういうや、僕は誰に起されたんだ?

とか頭の中でぐるぐると思考を巡らせていたが、それは不意に中断させられた。

突然倉庫の扉が開いたからだ。

とりあえず目を瞑る。

いかにもまだ気絶したままです一的なオーラを全身から発するよつ
念じ、自らの

「動」

の気配を殺す。

要するに死んだフリだ。

「おはよう御座こます、よく寝れましたか？」

バレてました。

軽く叩打ちして相手に向き直り、皮肉たっぷりに言つてやつた。

「…お陰様で気持ち良く眠れました」

「ははは、それは良かった。それなら田覚めなければ良かったですね？」

朗らかに笑い飛ばされた。どうやらジョディの面の皮は通せなかつたみたいだ。

「…ジョディさん顔じゃない気がするけど…」

顔の布は取り払っていた。声もそうだが、顔も事務所で会つた時のジョディのそれとは食い違う。

今のジョディはつるつとした見た感じ病弱そうな女性だ。少し若返つた感もある。

ジョディがふん、と鼻で笑う。

「…」Jがお望みなのかしら?」

カチリと何かのスイッチが入る音。
と、瞬時に顔、声、体格に至るまでが大人っぽい艶のある女性のそ
れに切り替わる。

宇宙の闇ルートの技術は口進月歩びじゅか秒進口歩…してやられま
した。こんな装置まで開発されてるとは…

「随分と甘い方ね、実は別人である事を期待していたのかしら?」

口調は変わっているが、言葉に含まれた棘は全く変わらない。

「甘い?何言つてんだか…確認だよ確認。ジョディさんが正真正銘
S-Tなら、遠慮する必要は皆無だからね」

真顔で下から言い放つ。床に積もつた埃が台詞に合わせて舞い上が
る。

「…口を開けるのも苦しいだろ?に、随分とやせ我慢するのね?
…そういうのが嫌いなんですよ、H-Rさん」

忌々しそうに顔をしかめて、頭にブーツをゴコゴコと押し付けてく
る。

いや痛いから。

「何故、私がこんな手間を…何故、貴方達H—Rは…こんなにも邪魔なんでしょう。今回だつてそうだ。ちょっとした不注意で正体がバレて始末した女がたまたまああいう都合のいい宗教と職に属していく、上手い具合に仕事の取引が出来そうだと思つたら…」

「あんたの失敗から生まれたタナボタじゃん…つていたたたつ！」

すっげ力入れられた…頬の骨折る気か。

「話は最後まで聞くべきですね。…順調のはずだつた。あの赤マント男がこのジョディ…私がなりります前の女の知り合いでいなければ…。よりもよつてH—Rが友人ではバレるのは時間の問題…だからこんな手を打ちました」

一息にそこまで喋ると、一寸言葉を切る。

ジョディ…いや、厳密には違うか。偽ジョディは饒舌だつた。

自分の計画が上手く行つてるとか思つて調子に乗つてゐるのだろう。

「上手い具合に貴方達は分散してくれました、そしてこうして一人確保した…後は貴方を人質なりなんなりに使えば楽にカタがつきます」

そう信じて疑わないのか、実に愉快そうな笑みを浮かべている。

「……………ブツ」

思わず笑つてしまつた。

手が自由なら口を押さえてジャガーさんっぽくプスプス笑つてしま

「うそだ。

案の「定偽ジョーティ」の機嫌を損ねてしまつた。顔を踏みしめるよつて力を込めながら言つてくる。

いやだから痛いって。

「何ですか？貴方、自分の立場分かつてますか？」

「これ言つと怒りそうだけど…

「…まあ…あんたよつは」

面白こよつて偽ジョーティの顔が歪むのが足の下からでも確認出来る。

「いや、分かってませんね。今この場でジョーティさんと同じ場所に送つてあげましょつか？」

分かりやすい事を言つてくる。

確かにこの状況、僕には一方的に不利だ。下手な事を言つてしまえば本当にこんな所であの世に行つてしまいかねない。

だけど。

「…それは無いね。予感がしないから」

それは相手には意味不明の言葉だつただう。だが僕には深い意味がある。

大した能力も無い僕がこれまで生き延びてきたタネとも言える、自分でも良く分からぬ第六感だ。

「…何を言つてゐるのか分かりませんが、貴方の力で今の状況を開できそにはありませんね」

「…もつとも。

僕は今きつたない床に手足縛られて寝かされてる訳だし。

「…僕の力では、ね。」

「…僕の力では、ね。」
と同時。

「滅牙、龍殺陣ッ！」

耳をつんざく轟音と共に吹き飛び扉。舞い上がる粉塵。

その煙の中を突つ切つて現れるのは薄暗くても鮮やかな赤。

も「、キター！って感じだ。

勿論奴はじゅんぺまん。

「「」か！辺りの倉庫^{カニ}端からぶつ飛ばしてたけど……」
「……」

右手に漆黒の長刀を携え、予想通りのコアクションを返してくれる。

説明している暇は無い。僕はすかれて叫んだ。

「じゅんぺまん！」
「これはジヨーティ^{ジヨーテイ}さんの偽者だ……！」

「何い！？似すぎだろ！……」

「こや僕もジヨーティ^{ジヨーテイ}たナビセーと云かく別じ……」
「」

喉元にナイフを突きつけられ、僕は思わず口を開いた。

「「」までよ……じゅんぺまん。」
「お仲間がどうなつてもいいのかしり？」

ジヨーティの口調に戻った偽ジヨーティがじゅんぺまんに言い放つ。例の艶っぽい声で。

「「」

たじりぐじゅんぺまん。

僕は躊躇せず言い放つ。

「いいから早くー。」

奴も躊躇せず言い放つ。

「分かつたア！滅牙ア、龍飛槍ツ！！」

言つと同時腰溜めに構えた刀を突き出し、刃物のよつに鋭い一陣の風を巻き起こして飛ばしてくる。

「ちょつ、待……はええよーー！」

「何つー？！」

『ギヤアアアアアアアアアーー！』

見事なまでの直撃。

不意を突かれたのが偽ジョーディも何も出来ず、埃と段ボール、そして僕と共に吹き飛ばされていった。

+++

「——つたく、殺す気かッ！！

「いや、加減してたつて。それに加減の為に予備動作小さくしたから隙も無くなつた。効率良くなね？」

此処は例のキャバクラ事務所。

偽ジョーディをふん縛つて搬送した後、適当な理由をキャバ嬢もとい信者の皆さんに説明しに来た所で、溜まつてた鬱憤を吐き出してしまつた。

僕は全身絆創膏だらけ。偽ジョーディが創傷塗れだつたのを考えれば軽い怪我だけれど…

じゅんぺまんはくらくらと笑つてゐる。何気にムカつぐ。

「いや効率とか言われてもなあ…」

隣の部屋では今、ひろきまんとレイが事情を説明してゐる。どうやら黒幕はジョーディさんで、警察のお縄になつたと説明していふようだ。

これだと本物のジョーディさんが悪者になつてしまふけど、仕方ないかな…あそこまで似ていた偽ジョーディを偽者と説明するのはちょっと難しい。宇宙に関して話してしまつとまたややこしく話になつてしまつ。

この団体、どうなつてしまつんだる…なんて言つたが、ひろきまんなら

「これは各個人の問題だ、これ以上私達が介入すべきでは無い」と思
う

とか言うんだろううなづ。

隣の部屋ではさつきからじよめきが途絶えない。

リーダー的存在を失ったのだから仕方ない話だらう。

「教祖に向て言つたら……」

「この支部はどうなる訳?」

……支部だったのか。

「そもそも、いきなり逮捕だなんて……私達に話もさせてくれないん
ですか?」

「さうか……逆にあなた達の方が怪しくない?」

「……それは

ひのきまんが口うる。扉越しに感じる黒いオーラはレイだらう。

その時、これまで静かだった奴が口を開いた。

「ハセヒテめえ等ちつたあ黙れ」ラア――」

「ううに居ないと困つたら、たつくまんもあつて居たらし。」

一瞬で水を打つたように静かになる。

「やつあから聞いてりや」「いや」「いや」「いや」と…そんなに慌てる事かア？わーつたわーつたよ、言つてやらあ。お前等のジコチイつて奴は利用されたあげく殺されちまつたんだよ！

「いいおが氣に遣つてせつてうせの工企業みてえ」「ぐだぐだ喚きやがつて、草場の影からあの女も悲しんでんじやねえのか」「アー！」

ズダン、と机を叩いたらしき音。

なるほど、間違つちやあいない。

僕は思わず笑みを零していた。

たつくまんは続ける。ひねをまんも止める気は無かった。

「お前等にとつて奴がどんな女だつたかは知らねーがな、奴が居な
くても何とかやつてくつてくらゐのノリで行けよー……つたく、鬱

そう吐き捨てて、ひかりの部屋に押し入ってきた。

「ちひ……何で夜中にこんなトコでこんな事やつてんだ。オレ先帰つてるわ」

苛々してこらのを隠しもせざ事務所を出でいく。

「……元はと言えばあいつが今行けりつて言つたんだけどな隣でじゅんペまんが口を開く。彼もまた、笑つている。

「……そういう事だ。死んでいるよりは生きていると思わせた方が良いと判断して誤魔化そうとしていた。すまない」

ひろきまんの事だ、素直に頭を下げるのだろう。一呼吸程度の間があつた。

「…君達がこれからどうするのかは私達がどういふと言える立場じゃないが、あの男が叫んでいた事も多少は心に留めておいてくれると嬉しいな」

そう言って、彼もまた此方の部屋に来る。

「…………行こう。」

異存は無かった。

こつして、今回の事件は幕を閉じた。

先に行つてしまつたたつくまん以外のメンバーと、空が白み始めた街を歩いていく。

コーレイ騒動も偽ジョディが起こした事件をコーレイのせいにして誤魔化したものだろう。

皆の他愛ない話を聞きながらそんな事を考えていた。

：待てよ？

僕はコーレイが偽ジョディだと思っていた。だけど僕が窓でコーレイを見た時、偽ジョディは事務所内に居たはずだ。

先に確認するために何らかの方法で窓に移動していたのだろうか？

それに

「なあじゅんぺまん。どうして僕の居場所が分かつたんだ?」

そうなのだ。通信機の発信源を辿れば分からぬ事も無いだろうが、そういう機械はアパートに置いたまま。

連絡しない限り、じゅんぺまんが僕の居場所を知る術は無い。

「へ? どうしてつてお前が連絡して来たんだろ? が」

は？

「いきなり通信機から遠くで何か鳴ってるような音が聞こえるな」とか思つたら何かお前戦つてるみたいだつたし、暫くしたらお前、郊外の倉庫の何処かに捕まつてるみたいって言つて来だる」

?

おかしい。おかし過ぎる。

僕は思わず通信機を取り出した。

当然スイッチはOFFだったけど…

刹那、声を聞いた気がした。

「有難う」

といつ、彼女の声を。

ユーレイ大騒動・完結編（後書き）

やつとこの話が終わりました…ちょこちょこ書いてたんですが、まだ読んでる方が居たら有難う御座りますです、はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0354a/>

たっくまん

2010年10月21日05時55分発行